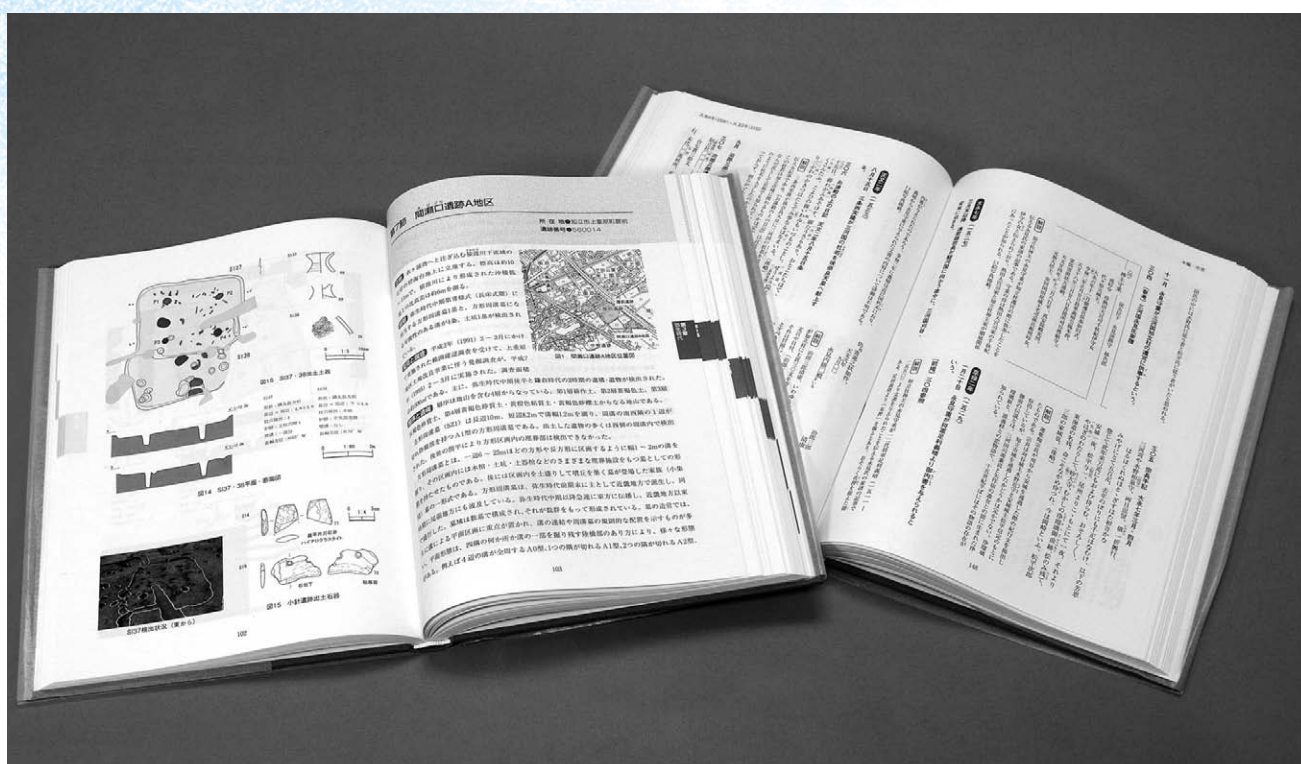


新編 知立市史だより

第6号



『新編知立市史3 資料編 原始・古代・中世』発刊！！

先回の市史では編集されなかった資料編を刊行しました。最新の研究成果が反映され、知立の大昔について知ることができる市内の遺跡の紹介や文献史料などを多く掲載しています。ぜひお買い求め下さい。



市史のホームページも見てくださいね

 知立市

2015.11.1

新編知立市史刊行記念講演会

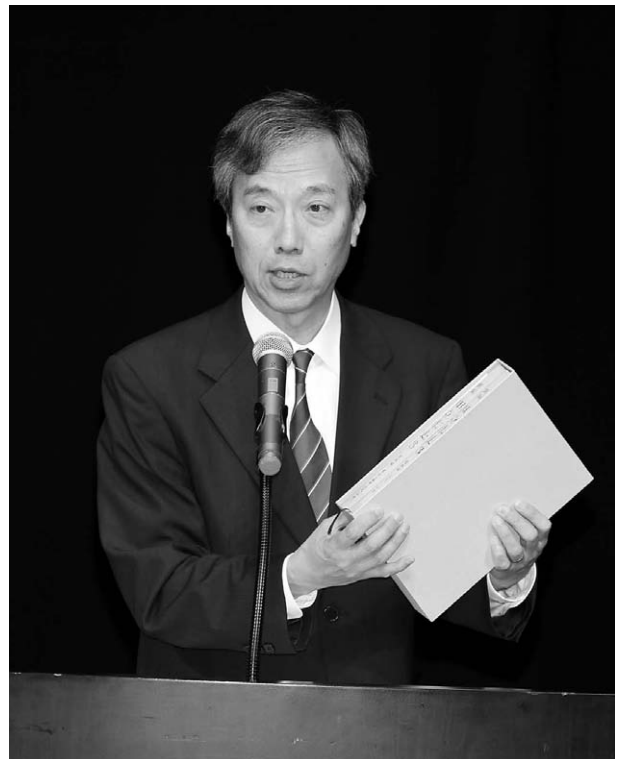
新編知立市史第二回配本となる『資料編 原始・古代・中世』が平成二十七年三月に刊行されたことを記念して、考古部会長（当時）の清水正明氏と古代・中世部会長の西宮秀紀氏に、それぞれ講演していただきました。

お蔭様で、当日は一二〇名もの方々にご参加いただくとともに、皆様よりご好評をいただきました。

また新編知立市史の編さん当初からご尽力された考古部会長の清水正明氏は、六月三十日をもって部会長をご退任されました（六頁に文章掲載）。後任には長田友也氏が就くことになり、通史編に向けて活動していきます。



清水正明氏



西宮秀紀氏

開催日

平成二十七年六月二十日

午後二時～四時

知立市文化会館（パティオ池鯉鮒）花しょうぶホール

■内容（講演要旨は三頁をご覧ください）

・清水正明氏（考古部会長〔当時〕 知立市文化財保護委員長）

「大昔の知立―遺跡と出土遺物―」

・西宮秀紀氏（編集委員会代表

古代・中世部会長 愛知教育大学教授）

「古代・中世の知立―『新編知立市史3』収録の史資料から―」

講演要旨

■「大昔の知立―遺跡と出土遺物―」

知立市は東西四km、南北四kmの小さな町ですが、古くからの歴史が数多く残されています。遺跡の多くは、猿渡川や逢妻川を臨む台地の縁で見つかっていて、現在登録されている遺跡は三十九か所です。それら遺跡は旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世の各時代にわたります。古い時代の石器としては、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の石槍類、縄文時代の石鏃類が多数見つかっています。人が居住した竪穴住居跡は縄文時代中期後半（四五〇〇年前頃）の時期のものが上重原町間瀬口遺跡で三棟、小針遺跡で一棟見つかっています。

知立にムラ（小集落）がつくられるのは、弥生時代中期後半の時期（紀元前一世紀）からです。猿渡川をはさんで西中町荒新切遺跡、天神遺跡、上重原町小針遺跡から、合わせて四十棟の竪穴住居跡が見つかっています。この人たちは米を作って生活していました。水田跡は見つかっていませんが、木製の農具や稲穂を刈り取る石包丁という石器が出土しています。

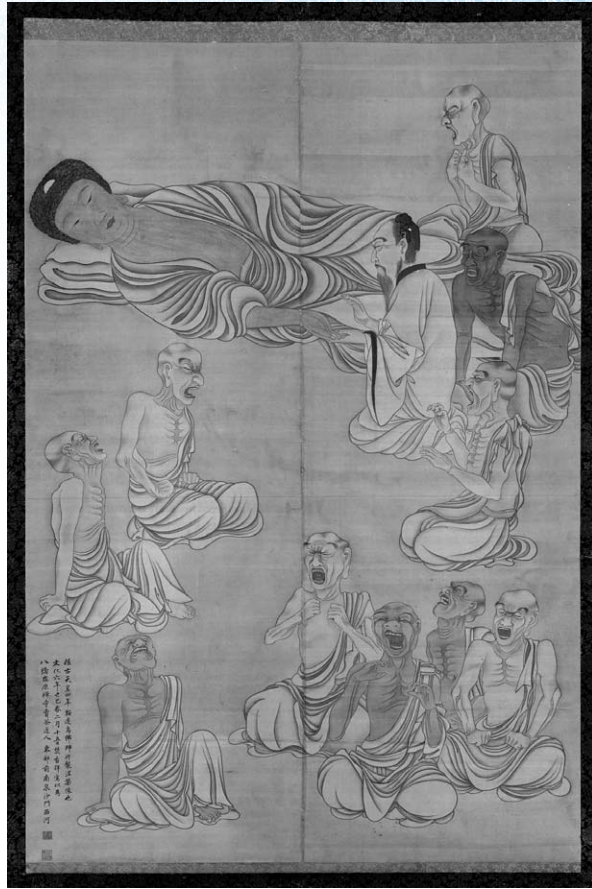
古墳時代、古代も小さなムラが断続的に営まれていました。竪穴住居に居住して、猿渡川や逢妻川の沖積地の水田で米作りをする生活が続いていました。

古代末から中世になると「重原荘」の時代になります。上重原町腰前遺跡、小針遺跡から溝で区画した屋敷地跡が見つかり、掘立柱建物跡、井戸、墓などが見つかりました。屋敷地跡には荘司の居館を推定させるものも見られました。（清水正明）

■「古代・中世の知立―『新編知立市史3』収録の史資料から―」

『新編知立市史3』の古代・中世に係わる史・資料の特徴について、大きく四つの観点から史資料（レジュメ六枚）を掲げ、解説しました。まず、「一、木簡と知立」では、知立（チリュウ）という地名が七世紀後半には「知利布」という表記でサト名として存在し、八世紀に入り現在と同じ「知立」という漢字二文字の表記が使用されていたこと、などを述べました。「二、正倉院文書と参河」では、正倉院文書に残された碧海郡関係の文書断簡（丹を包んでいた包装紙など）がどのようなものか写真で示し、それをどのように史料本文として作成したか、などを説明しました。「三、知立神社」では、知立神社が仁寿元年（八五一）に従五位上を授けられてから正一位を授けられる過程や、十六世紀に焼失し重原に遷座し、再び現在地に戻ったといわれていること、知立社二十代神主の永見貞愛が結城秀康と双子として生まれ、のちに永見家で養育されたと伝えられていること、知立神社所蔵の『三河国永見氏家譜』を別編で収めたこと、織田信長・徳川家康・豊臣秀吉の妹（朝日姫）が池鯉鮒に宿泊していたこと、などをみました。「四、八橋」では、まず八橋の地名のルーツである『古今和歌集』の歌や『伊勢物語』・『更級日記』などを取り上げ、次に中世以降の紀行文に、京から鎌倉に下る途中に八橋の宿に泊まつたり立ち寄りたりしていた記事があること、そして当時の八橋の状況について記されていること、また足利尊氏の軍勢が八橋に到着していたこと、などについて紹介しました。（西宮秀紀）

在原寺所蔵の釈迦涅槃図について



八橋町の在原寺が所蔵する釈迦涅槃図(歴史民俗資料館保管)は、市の指定文化財にも指定された名品ですが、とても変わった涅槃図です。涅槃図というのは、仏教の開祖である釈迦の命日をしてのぶ行事・涅槃会で本尊として用いられる絵画で、釈迦の臨終の様子が描かれます。

ふつう涅槃図というものには、臨終の釈迦だけでなく、死の床を取り囲むように生える沙羅の木、背後を流れる跋提河、菩薩から鳥獣にいたるまでの生きとし生けるものが悲嘆に暮れる様子などが、『涅槃経』や『摩訶摩耶経』といったお経の内容に即して描かれるものです。ところが、この涅槃図にはそのような描写

がありません。試しに、「涅槃図」とインターネットで検索してみてください。ヒットする涅槃図に一定のパターンがあること、在原寺の涅槃図がそうした涅槃図のパターンとは全く異なることに気づくはずですよ。

実はこの涅槃図には原本があります。名古屋博物館にあるそれは、江戸時代の有名な絵師、谷文晁が描いたものです。スケッチ魔として知られる文晁は、寛政八年(一七九六)に奈良旅行をし、法隆寺の五重塔に置かれた塑像の涅槃群像をスケッチしています。文化元年(一八〇四)に完成した名古屋博物館の涅槃図は、そこでスケッチされた像を組み合わせて描かれたものです。日本最古の涅槃の表現をもとに描かれた涅槃図という趣向です。

文化六年(一八〇九)、この涅槃図に写しが作られます。在原寺の涅槃図です。原本が紙に書かれていたのに対し、こちらはより高価な絹に描かれていますので、ただのコピーではなかったでしょう。描いたのは文晁ではなく、江戸・日暮里の南泉寺の住職だった西河和尚。在原寺の方巖売茶翁のために写したと画中に書き記されています。写しが作られる数年前、売茶翁は在原寺の復興に着手しますが、それまでは江戸で、この南泉寺界隈のどこかの寺に身を寄せていたようです。西河和尚はその頃の知り合いでしょう。南泉寺と文晁のアトリエは比較的近い場所にあります。さらに想像をたくましくすれば、西河和尚は文晁から絵を学び、完成間もない涅槃図の下絵を自由に使える立場にあったのかもしれない。郷土を代表する文人・売茶翁の交際の広がりを知る上でも、この涅槃図は貴重な文化財といえましょう。

(文化財委員会 委員長 鷹巢 純)

知立弘法の賑わい

こうぼう

民俗部会では、知立市域の各ムラを回り、高度経済成長以前の生活様式についての聞き書き調査を重ねています。

年輩の人たちからお聞きするかつての楽しみには、必ず知立弘法の話が出ます。牛田の大正十一年生まれのある話者は、「弘法さんには若い頃はよく行った。お店がすぐくて、境内と参道の両脇にずっと出ていた」といい、ムラの人たちの楽しみになっていました。八橋の昭和六年生まれのある話者も、「遍照院には昔はぞろぞろ出かけた。信心ではなく、買い物目当てだった。うなぎ屋でも何でも押すな押すなの人で、店の人たちがこの日一日働けば、一か月は食べられると言っていた」と語っていて、縁日での買い物と食べ物で参詣の魅力になっていたことがうかがえます。



御開帳の際の善の綱（遍照院）

三河三弘法の一番札所「知立の弘法さん」は、正式には真言宗豊山派ぶざんはの寺院で、弘法山遍照院といえます。寺伝では、弘仁年間（八一〇〜八二四）に弘法大師が関東への巡錫じゆんしやくの途中、建立したものとされ、御祥当日（旧暦三月）の御開帳の時をはじめ、旧暦二十一日の弘法大師の命日には多くの参詣者で賑わ

い、たくさん露店が立ち並びます。明治の頃、遍照院の住職が京都・東寺の弘法大師の縁日に多くの露店が出ているのに着目し、露店商を誘致したのが始まりとされ、現在、西三河地方でも最大規模のタカマチとして知られています。

縁日で寺社境内や沿道に店を出す場合、「場所を割る」仕事が必要で、的屋の親方が取り仕切ります。当日朝の受付の際、誰がどんな店を出すのかをテイタと呼ぶ紙に書いて提出し、これに基づき、境内の見取り図を作って配置が決められます。

露店商にはいろいろな種類があり、たこ焼きや焼きそばなどの食べ物や売るものはコロビ、イタミセと呼ばれます。昔は板の上で売っていたことから出た呼称です。座って食べられる大規模な茶店はヤチャといえます。品物や売るものはイチ（市）と呼ばれ、弘法縁日では衣料品や雑貨、農具などの他、チリメンジャコや干物、ハンペンなどが商売されます。中でも広い面積を必要とするのがボクと呼ばれる植木屋、ワンチャと呼ばれる茶碗屋です。射的、輪投げ、鮫釣りなどの遊戯はテキと呼び、大きな装置が必要となり、場所代も高かったとされます。見世物小屋やお化け屋敷などはタカモンといい、大昔は遍照院境内にも出ていました。かつては口上こうじょうを述べて啖呵たんかを切り、お客を扱う気にさせるタンカバイにも人が集まりました。

「的屋は商いをさせてもらっている神社仏閣を大切にしないでほならない」といい、寄付や出資をして遍照院を支えています。三河三弘法の賑わいは、寺と露店商の協力によって作られていたといえます。

（民俗部会 調査協力員 服部 誠）

資料編 考古(原始・古代・中世) 刊行を終えて

新しい市史を編さんし、後世に残していきたいという話が出てきたのは、平成十九年頃だと記憶しています。前回刊行の『知立市史』から三十年余経過し、その間に市は大きく発展、変貌し、一方で失われたり、忘れられたりしていくものも数多くあります。それらをできるだけ調査し記録に留めることが是非必要だということと具体化してきました。顧問の故愛知教育大学名誉教授新行紀一先生のご尽力で編集委員会のメンバーが決定し、平成二十二年一月に第一回編集委員会が開かれました。

「考古部会」は、市内遺跡の発掘調査に関わってきた人達を中心に構成し、第一回の考古部会を平成二十二年の五月に開催、編集の基本方針を次のように確認し活動を開始しました。その後、部会を三ヶ月に一回の頻度で実施していきました。

- 一、前市史刊行後に行われた発掘調査の成果の集大成
- 二、写真・図を多く使い、遺構と遺物を対比させ、理解し易いものにする
- 三、歴史民俗資料館収蔵品や個人所有の資料も悉皆調査する
- 四、主要な項目について、補論として論考を加える
- 五、自然科学的な分析結果を加える

『新編知立市史』資料編 原始・古代・中世』は、文献資料と考古資料を分冊化することと、考古資料編はオールカラー化する事が、故新行先生と編集委員会代表の西宮秀紀先生の強力なバックアップにより決定されました。考古編の頁数は三〇〇頁の目標が与えられましたが、執筆分担を決め概算の頁数を積算すると四五〇頁程度になることが予想されました。頁数を目標内にするため、掲載するものの絞り込みと、図面や写真の大きさの見直しや統一等の取り決めを行いました。平成二十二年十二月に目次と執筆要領を決定して執筆にとりかかり、平成二十五年九月末までに執筆完了の目標で進めることで合意しました。書けた原稿から月一回ペースで読み合わせを開始し、平成二十六年四月六日に全原稿の読み合わせが完了。以後、校正を行い平成二十七年一月末に五稿の校正を完了し、予定通り三月末に刊行でき、何とか役目を果たすことができました。この資料編が市民の方々に、折に触れて役立てていただければ望外の喜びであります。

新編知立市史の開始準備から七年、長くて短い充実した期間を過ごさせていただき、資料編の刊行を区切りに、考古部会長を退任させていただくことにしました。これから平成三十二年度の通史編刊行に向けて、気鋭で博学な新部会長のもと、市民に喜んでいただけるようにまとめられることを期待しています。

編集委員の先生方、考古部会の皆様、市史編さん事務局の皆様、本当にお世話様になりました。ありがとうございました。

(考古部会 前部会長 清水正明)

活動記録

(平成26年8月1日～27年8月31日)

編さん委員会

26年8/20
27年8/28

編集委員会

26年10/3
27年1/23、4/10、7/3

部会

考古部会

26年8/30
27年4/25

26年度は刊行に向けた原稿校正を主に、今後は通史編に向けて活動していきます。

古代・中世部会

26年8/30
27年4/10、6/2・7/22
(八橋編打ち合わせ)

26年度は原稿校正を主に、東京大学史料編纂所などにも調査に行きました。今後は八橋編と通史編に向けて活動していきます。

近世部会

26年12/5
27年2/26、8/13(打ち合わせ)

26年11月に国立歴史民俗博物館で池鯉鮒宿の絵図調査を行い、現在は資料選定・翻刻を進めています。

近代・現代部会

26年9/14、11/22、12/21
27年2/11、4/5、5/9、5/31、6/28、7/25
資料選定が終了し、原稿執筆の段階に入りました。

民俗部会

26年11/30
27年3/7、8/29

26年調査・聞き取り

8/31遍照院、6月～9月秋葉まつり関係、11/13浄教寺、11/14浄教寺、11/17順誓寺・浄教寺、11/18順誓寺、11/21本町、11/27中山町、12/3宝町、12/6個人、12/7日吉神社、12/15中町、12/16新地町、12/17山町、12/30個人、12/31浄教寺他

27年調査・聞き取り

1/1浄教寺・日吉神社、1/2知立神社・遍照院、1/11個人、1/13個人、1/15中町、1/17個人、

1/22個人、1/29個人、

2/16個人、2/20個人、

2/28個人・日吉神社、3/1個人、3/9個人、3/15個人、3/17個人、3/21個人、4/8来迎寺、4/19薬師堂、4/25萬福寺、4/29弘願坊、3月～5月知立まつり関係、6/23個人、7/11個人、7/18個人、7/31知立神社、8/2個人、8/18個人、8/28秋葉まつり関係

聞き取り調査を進めており、知立まつり・秋葉まつりではDVD製作の撮影も行いました。

自然部会

26年8/3～10中間発表会、10/5
27年1/31、4/11、7/4

気象班

26年8月下旬地温観測、10/26調査、11/29調査、

12/9調査

8/13・10/4・11/30・12/7・12/10データ回収

27年2/7・4/11・8/8データ回収

生物班

26年9/2調査、9/7会議、

9/23会議・合同調査、11/16会議、

27年1/31会議、4/11会議、

5/31合同調査、7/4会議、8/14ライトトラップ

順調に調査が進んでおり、データ解析や図・表などの作成にも取りかかっています。

文化財委員会

26年10/26
27年1/23(打ち合わせ)、

6/28

文化財調査

26年11/28無量壽寺、12/10西教寺、12/11宝蔵寺・無量壽寺

27年7/7西教寺・無量壽寺
現在、27年度刊行に向けて原稿校正を行っています。

お礼

市史編さん活動に、様々な所で様々な方々にご協力・ご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。

好評販売中

『新編知立市史3 資料編 原始・古代・中世』

B5版二冊箱入 四五〇〇円

『資料編 原始・古代・中世』は、考古遺物や遺跡を掲載する「考古(原始・古代・中世)」と、文献史料や木簡もっかんを掲載する「古代・中世」の合冊です。

「考古」では、市内発掘調査により出土した土器などの遺物や遺跡を、オールカラーで多くの図や写真とともに紹介しています。「古代・中世」では、碧海郡や三河の史料及び知立神社関係史料など知立に係わる史資料を掲載し、さらに読み下しや解説を付わかりやすい資料編になっています。

『新編知立市史5 池鯉鮒宿本陣御宿帳』

B5版 二六〇〇円

刊行物は、市役所市民課の窓口
または歴史民俗資料館で
お買い求めいただけます。



知立市マスコット
キャラクター
ちりゅっぴ

刊行予定

『新編知立市史 別巻 文化財編』

平成二十八年三月刊行(予定)
A4版オールカラー 二六〇〇円(予定)

知立には国指定の知立神社多宝塔や山車文楽だしばんらく・からくりをはじめとして、各寺社が所蔵する絵画や彫刻など多くの文化財があります。今回文化財編を刊行するにあたり、23年度には市内各寺社の悉皆調査しつがい、さらに24〜26年度には撮影及び本格的な調査を行い、その成果を一冊にまとめました。特に山車文楽・からくりの首かしらは全件掲載しており、見応えがあります。

多くの写真を掲載しており、詳細な解説とともに紹介します。

お問い合わせ

知立市教育委員会文化課市史編さん係

〒四七二-〇〇五三

知立市南新地二丁目三-三(歴史民俗資料館内)

TEL 〇五六六-八三-六七八九

FAX 〇五六六-八三-六六七五

E-mail sisi-hensan@city.chiryu.lg.jp

新編知立市史だより第六号 平成27年11月1日発行

発行 知立市教育委員会文化課市史編さん係

市史編さん係ホームページもご覧ください。

<http://www.city.chiryu.aichi.jp/hensan/>